

相模人形芝居 次の担い手へ

来月13日から小田原で講座



相模人形芝居下中座の演技＝下中座提供

小田原市の国指定重要無形民俗文化財「相模人形芝居・下中座」が次世代の担い手を育てようと、26年ぶりに人形教室を開講する。3人で人形を操る技を基本操作から徐々に学び、1年後には受講生による演目の上演をめざすという。

下中座は江戸時代中期から小田原市東部の小竹地区で継承されてきた。天保の改革の奢侈禁止令下、ひそかに人形と技を守った。1980年代、担い手が10人を切り、人形を2体しか扱えず、存続が危ぶまれた。

しかし、91年に開講した人形教室で学んだ若い世代が参加し、活動が続いた。

市立橋中学校や県立三宮高校の部活動とも提携。演目は伝統的な時代物などに

加え、「足柄山の金太郎」など創作物もある。

現在の担い手は20～80代の各世代にちらばる30人余りで、やや高齢化したという。「先輩がそれぞれの技を若い人に伝えられるうちに、2回目の教室を開きたい」（林美禰子座長）と1年間の講座を企画した。

第2回教室の最初の講座は5月13日午後1時半～3時半、小田原市酒匂2丁目の市保健センター3階。受講無料。主に同センターを会場に、月2回の土曜日の講座を1年間続ける。

下中座ホームページ（<http://www.shimonaka-zs.com>）などで申し込む。問い合わせは林さん（090・8315・5445）。

（村野英一）